

五重塔

映画文学人生論

原作：幸田露伴 (1892年) 新聞「国会」
監督：五所平之助 (1944) 秋葉正俊 (2007年)
脚本：川口松太郎 落合幸恵
出演：十兵衛 花柳章太郎 ガッツ石松
上人 大矢一次郎 竹脇無我
源太 柳永二郎

源太十兵衛ともに聞け、今度建つべき五重塔は唯一ツにて建てんといふは汝達二人

幸田露伴『五重塔』のあらすじは、のっそり十兵衛と呼ばれる大工が谷中感応寺に五重塔が建立されることを聞いて、一生に一度の仕事としてやらせてほしいと朗円上人に願い出るが、本来なら川越の源太が請け負うべき仕事だ。源太は十兵衛の師で、十兵衛は源太に恩義がある。

上人は二人を寺に呼び、「源太十兵衛ともに聞け。今度建つべき五重塔は唯一ツにて建てんといふは汝達二人、二人の願ひを双方とも聞き届けては遣りたけれど、其は固より叶ひがたく」と、申し渡した。二人で話し合って決めよというのだ。

源太は二人で一緒に作ろうと提案したが、十兵衛はそれを断り、結局、一人で五重塔をつくる。その塔は暴風雨にもびくともしなかった。十兵衛は職人の意地をつらぬき、名人の評判をかちとつたことになる。

十兵衛の行動をよしとして肯定するか、それともけしからんといって否定するか。その反応ぶりによって読者の人格が問われる。

五重塔を一人で建立すれば、個人としての理想は実現するが、恩義のある師を排除して自分だけの功名としたことは義理人情に反する。

日本の社会では古くからいわゆる名人気質、職人気質が一目おかれる気風があるが、その反面、出る釘は叩かれるという傾向もあり、このような



五重塔

映画文学人生論

人間関係のもつれは、黒船来航以前からもあつたと想像される。しかし、それが自由思想と結びついて個人の権利として意識されるようになったのは黒船来航以後のことだ。現代の職場でも同じような人間関係のもつれが随所に見られるだろう。

文学史では、明治二十年代の一時期、尾崎紅葉と幸田露伴が傑出した作家と目され、紅露時代と呼ばれた。「写実主義の尾崎紅葉、理想主義の幸田露伴」と並び称されたという。

では、露伴の理想とするものが何だったかといふと、よくわからない。単に理想主義的な生き方を追求する人物を好んで描いたというだけのことかもしれない。十兵衛のような職人気質の生き方をよしとしていたのだろうか。

『五重塔』の映画化については何度か話があつたが、「あれは着物に作ったのだから、襦袢にしたり法被にしたりされては迷惑なんだ」といって露伴は断っていたという。それでも昭和十九年に五所平之助監督によって映画化されたが、私は観る機会に恵まれていない。

平成七年に秋葉正俊監督によっても映画化されているが、これは。理想の陶芸の地を求めて、青森県五所川原にやってきた十兵衛が熊谷常光院の老円上人の依頼を受けて、五重塔の陶器を製作するというように筋が改変されている。

のっそりと嵐に堪える寺の塔